

視 察 調 査 報 告 書

< 総務企画委員会 >

令和元年第 6 回沖縄県議会（11月定例会）

令和元年12月16日（月曜日）

沖 縄 県 議 会

総務企画委員会視察調査報告書

視察調査日時

令和元年12月16日 月曜日（1日）

視察調査場所

那覇市

視察調査事項

広報、危機管理及び消防防災について（那覇市津波避難ビルについて）

広報、危機管理及び消防防災について（首里城の火災について）

視察調査概要

別紙のとおり

参加委員（11人）

委員長	渡久地	修	君
委員	花城	大輔	君
〃	又吉	清義	君
〃	中川	京貴	君
〃	仲田	弘毅	君
〃	宮城	一郎	君
〃	当山	勝利	君
〃	仲宗根	悟	君
〃	比嘉	瑞己	君
〃	上原	章	君
〃	當間	盛夫	君

随行職員（2人）

議会事務局政務調査課副参事 中村 守

議会事務局政務調査課主査 川端 七生

1 調査事項：那覇市津波避難ビルについて

（1）那覇市津波避難ビルの館長による概要説明

東日本大震災で、沿岸地域にある宮城県塩竈市は被害が少なく、亡くなる方が少なかった。理由としては、一目散に高台に逃げろという教育を昔からやっていたことと、小中学校を中心に定期的に津波避難訓練を実施していたということであった。そういった教訓から、那覇市内にも110カ所ぐらいホテル等と協定を結んで、一時津波避難ビルに指定している。

ホテルだと夜間も逃げ込めるが、ビル等では夜間に逃げ込める場所が少ないので、公費でつくらないといけないという発想からスタートしている。ここは元若松市営住宅があった土地で、翁長元市長のときに建設のゴーサインが出た。

この敷地面積は2313平米で約700坪。1階の面積が1422平米で約430坪の敷地となっている。2階が1267平米で384坪、3階が1300平米で約395坪、4階は屋上で大体348平米、さらにその上にペントハウスがあって津波のときに避難できるようにということで、141平米で約43坪となっている。このような建物になっていて、高さは一番上まで行くと24メートルぐらいになっている。1階部分だけが少し高くて5メートルぐらいある。この地域に津波が来たときには、約2メートルから5メートルの高さになると予想されていて、最大遡上高が8メートルから9メートルくらいと聞いている。ただ、これは実際に来てみないとわからないが、5メートルを超える予想があり、隣に川もあるので、一気に水が上がってくる可能性があることから、2階までは避難所にはなっておらず3階から上が避難所という形になっている。

2階から上の施設は全て無料で貸し出している。2階では、子育て支援事業ということで、近くにある若狭浦保育所の外部機関みたいな形になっていて、職員1人と4名の非常勤の保育士さんがいて、ここで0歳から4歳ぐらいまでのお子さんとお父さん、お母さんが交流をしていたり、いろいろなカリキュラムが月曜日から土曜日まで実施されている。もう一つの部屋では、高齢者の介護予防事業として那覇市のちゃーがんじゅう課が利用しており、認知症体操や認知症カフェとして、机でコーヒーを飲みながらいろいろなお話をしている。あと、お年寄りを対象としたスマホの使い方講座も開かれている。木曜日になると近くの施設からここに来て定期的にいろいろな運動をやって楽しんでいる。そういった介護予防の事業も行

っており、中のほうにはシャワールームも完備されている。

3階は、教育委員会の生涯学習課が青少年育成事業として運営している。向こう側がダンスルームになっている。余りダンスで利用する人がいないので、卓球台を置いて利用してもらっている。また、反対側ではバスケット、バドミントンなどができる場所がある。

(2) 質疑応答

Q：2階の老人関係の部屋には平均年齢どれくらいの方が来ているのか。

A：65歳くらいから来ているが、上は80歳くらいまでいらっしやっている。大体70歳以上の方が多。

Q：子育て支援事業をしている部屋と交流はないのか。

A：交流があるかは把握していない。

Q：3階のバスケットなどができるような場所は、クーラーがついており、何か催し物できるようになっているのか。

A：ここはスピーカーの電源などもあるので可能だと思う。

Q：ここは、台風のたびごとに避難所として活用されているのか。

A：台風のたびごとに避難所として活用しており、観光客の方も含め30名くらいの方が来る場合がある。その際は3階は全部開放している。

Q：もし、避難生活をするとしたらどのくらい収容できるのか。

A：一応2000名となっているが一時的であって。就寝するとなると300名くらいである。

Q：この建物で避難訓練とか、避難時の生活の仕方など体験学習みたいなことは企画しているのか。

A：地域の方々が防災目的ということで使われるときは、優先的に使えるような形でやっている。そこのリーダーが応急手当ての仕方とか防災グッズの展示とか、新聞紙で燃料をつくるなどいろんなイベントを企画している。

Q：避難ビルというのは、県内ではここだけなのか。

A：全国でも平常時にこういう使い方をされているところは少ないと聞いている。この間豊見城市と糸満市から避難ビルをつくりたいということで見学に来ていた。

Q：パンフレットに自家発電の設備があると書いてあるが、どのくらいの時間使用できるのか。

A：3日分使用できる。コージェネレーションシステムでガスを燃料として発電機を回し、その廃熱を利用してお湯が出るというようなシステムになっている。また、発電機の上にソーラーシステムがついていて、それでいつでも発電できるようなシステムもある。

2 調査事項：首里城火災について

(1) 那覇市中央消防署長による概要説明

首里城は小高い丘にあり、かなり高低差があることから、車両がなかなか正殿付近に近づけなかった。まず、初動は午前2時41分に119番通報を受け、即座に第1出動で30名が出動した。消防の監視カメラが正殿付近から黒煙が見えるということで、すぐに第2出動で10名を追加して合計40名で活動した。首里出張所がまず一番直近にあるので、龍潭通りを池端交差点まで行き、その段階で龍潭のほうから首里城を見たときには、煙は特に確認できなかったということであった。それで駐車場の入り口に防災センターがあるのでそちらへ出向いて火災の情報収集を行ったところ、正殿が火を噴いているということであった。隊長がまず、正殿を確認したところ、龍柱の左手のほうから激しく炎が上がっている状況を確認したのでポンプ車から放水活動を展開した。さらに人命の危険はないか確認をした後に、奉神門のかんぬきをあけて扉を開き、放水銃から放水を開始した。さらに屋外消火栓を使って放水活動を展開した。

新聞等でもあったが、放水の時間は十数分ほどで水圧が低下したということで、次の策としてはどんどんホースを延長しながら、放水活動を展開するという形をとった。安謝ポンプ隊はさらに南殿番所裏側の放水を行った。車が近づけないということで、一番近いところでも約100メートル近くホースを延長しなければならなかった。私が到着したのが、火災発生から1時間ちょっと過ぎくらいだが、その際にはもう正殿は火に包まれていた。北殿側も半分くらい火が入って、南殿も大分火が入ってそういった状況が3時間から4時間ぐらい続くという形であった。上空にはかなり火の

粉が舞っており、やはり風の影響をかなり受けたのかなと思う。さらに火の粉が金城町1丁目から4丁目ぐらいまでかなり舞っているという状況で、芸大の第3キャンパスに3メートルほどの枯れ木があるが、そこから炎が上がっていたということで、上江田ポンプ隊のほうが消火活動をしている。

かなり火が強くなり、当初設定していた延焼阻止ラインを下におろしていく形を強いられた。最終的には奉神門の左3分の1の部分の屋根裏に火が入ったので、何とか奉神門だけは食いとめようということで、表からも裏からも放水活動を展開した。最終的に午前11時に鎮圧となり、午後1時30分に鎮火。ところどころ火がくすぶっているという状況が、その日の夜9時くらいまで続いた。その後、再燃火災が怖かったので、ポンプ車を1台ずっと常駐で配置をして明け方まで警戒をした。以上が当日の流れである。

(2) 質疑応答

Q：激しい炎で輻射熱により消防隊も撤退せざるを得ないということであったようだが、最終的にこの御庭から撤退したのは何時ごろだったのか。

A：撤退したのは3時半から大体4時くらいにかけて、徐々に撤退と放水を繰り返してということをやっていた。輻射熱に関しては御庭にあるトイレの前に置かれていたパイロンだが、熱の影響を受けてグシャっとなっている。

Q：地上から放水ができなければ、空中散布も考える必要があったかと思うが、那覇市消防本部としては検討しなかったのか。

A：火災時の条件を考えたときに、夜間であるということと、かなり風が強かったこと、さらに私が到着したときには、正殿から火災旋風とまではいかないが、炎がとぐろを巻いて上昇していくというような状況が見えたので、この辺の上空の気流にもかなり変化があったと推測された。空中からの散布でどういうことが起こるのかを考えたとき、地上から常時水をかけているほうが有効ではないかという判断があった。

Q：テレビで見る限り6基以上見えなかったが、最終的に消防のホースは

何口で放水していたのか。

A：最終的には26口。

Q：水圧が低下したというような話があったが、それは御庭の放水銃等含めての水圧が落ちたということか。

A：水圧が低下したのは、首里城に付帯する消防用設備の放水銃3基と屋外用消火栓3基。水圧が低下した要因は、御殿の下のほうに水源である120立方メートルの水槽があるが、その水を全部使い果たしたことによるものである。

Q：防災訓練、火災訓練の中でどれくらい使えば、どれくらい減るということはわかっていたのではないか。

A：口数によって時間が異なる。通常計算は2基使う計算でやるが、今回は放水銃と屋外消火栓で6基使用した。そうすると水源が枯渇する時間は、計算よりはるかに短くなる。

Q：戦後の沖縄の火災の中で、過去にこれと似たような大火災はあったのか。

A：那覇市内においては、神里原の大火など何十棟も燃えた火災もあつたりはするが、私が経験する中でこういった重要施設では、一番の大火災である。

Q：消防隊にけが人はいたのか。

A：応援に駆けつけた隊員が1人、熱中症と思われる症状で救急車で運ばれている。それ以外については人為的な被害は一切ない。

Q：ホテルだと何年かに一度ぐらい、避難経路のチェック等を消防署がなされるということを聞いたことがあるが、こういう観光施設というか、文化施設の避難経路や消防装置の点検のようなものは、1年ないし何年かのサイクルでやっているのか。

A：消防側の点検は、昨年立入検査を実施している。サイクルというのは特に決まっていないが、通常は消防設備の点検は、法定点検があり、毎年点検をしてそれを報告する義務がある。その内容で不備があったものは、すぐに対応している状態で不備はなかったと。立入検査においても若干の防火上の指導はあったが、改善はされているという状況

であった。

Q：正殿に向かってどこ側に配電盤というか、ブレーカーはあったのか。

A：正殿に向かって左側の奥のほうになる。ブレーカーが落ちていたかどうかは調査中なので答えは控えさせていただく。

Q：文化財の関係でポンプ車がなかなか正殿近くまで来ることが難しかったが、今後、再建するときにはもっと近づけるようにと消防としての要望はあるのか。

A：我々も、消防活動について深く検証していかないといけないと思っている。その中で、どうすれば文化財を守ることができるかという部分について、消防で検証した結果をできる範囲で提言をしていきたい。

津波避難ビル①



津波避難ビル②



津波避難ビル③



津波避難ビル④



津波避難ビル⑤



津波避難ビル⑥



首里城①



首里城②



首里城③



首里城④



首里城⑤



首里城⑥

